みるスポーツをスポーツ鑑賞と捉え、進めていくために必要な視点や課題の検討

岡原　光祐（兵庫教育大学）

１．目的

近年、みるスポーツに注目が集まっているが、一方でみるスポーツは量的拡大から質的向上へとつなげていくことが課題となっている。そこで、「スポーツ鑑賞」と捉えることがみるスポーツの質的向上に貢献しうるのではないかという仮説のもと、スポーツを鑑賞として捉える上で、必要な視点は何か、またどのような課題があるのかを検討することを目的とした。

２．方法

目的を達成に向けて、以下の手順で検討を行った。

１）芸術分野における「鑑賞」概念の検討

２）「スポーツ鑑賞」という概念の確定

３）みるスポーツを「スポーツ鑑賞」と捉える上で必要な視点の提示

３．結果と考察

１）鑑賞という言葉の概念を検討した結果、関連ワードとして美や美的体験、解釈という言葉が抽出され、「美」は狭義の美だけでなく、悲壮なものや滑稽なものなどを含み、広義の美と捉える必要が理解された。また、広狭の美を含めたものが美的価値であり、鑑賞者が美的価値を意識する体験が美的体験であった。つまり、美的価値は美的対象と鑑賞者との間に位置づき、芸術の場合はこの美的対象は芸術作品が該当すると捉えられた。

美的体験について、木幡（1980）は美的直観と美的感動の融合統一だと述べている。美的直観には「現象の直観」と「想像直観」、細部に表現された美を捉える「本質的直観」の３つがある。一方、美的感動とは美的直観から快感情が惹起されるものである。すなわち、美的体験の際、鑑賞者は直観しつつ感動し、感動しつつ直観している。また、鑑賞においては美的体験だけでなく、目に見えない要素を捉える解釈という行為もなされるべきであり、解釈行為によって芸術作品の本質を突き止めることが可能となるのである。

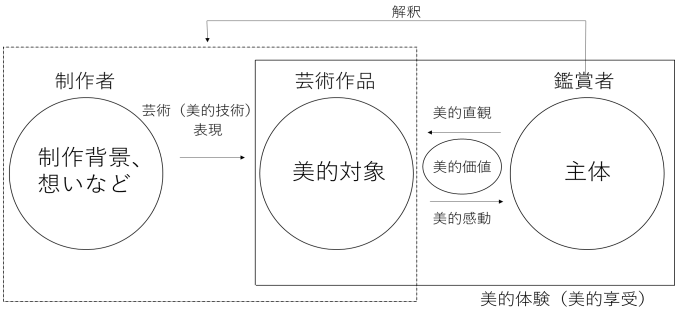

図１　芸術分野における鑑賞

したがって、芸術分野における鑑賞とは、芸術作品の美や本質を美的体験と解釈を通して捉える行為なのである。（図１）

２）1）で明らかになった鑑賞の概念をスポーツに当てはめると、まず美的対象については、スポーツはスポーツ実践者が施設や用具を駆使することで現象として現れることから、スポーツにおける美的対象はスポーツ実践者の行為となる。スポーツ観戦者はこの美的対象の美を美的体験によって把握することになる。例えば、美的直観としての「現象の直観」ではフォームなどの形態的な美を把握し、「想像直観」では過去の経験から現実の試合の状況を想像し、「本質的直観」ではインコースのボールをファールにならない腕を畳んでスピンをかけたホームランといった捉え方のように知見を伴った直観かつ感覚的な美感から深い感動へ至るのである。さらに、美的感動では生命力の表出と人格性の発露に対する感動が生まれる。

また、解釈という行為においては、現象として現れるスポーツ運動や試合展開、競技者の背景などが解釈すべき内容となる。さらに、解釈にはスポーツ経験や知見、他者との意見交換が必要となること、美的体験はスポーツの一瞬の出来事を捉える行為であることから、目に映る現象以外の部分を解釈により理解しなければならないのである。（図２）

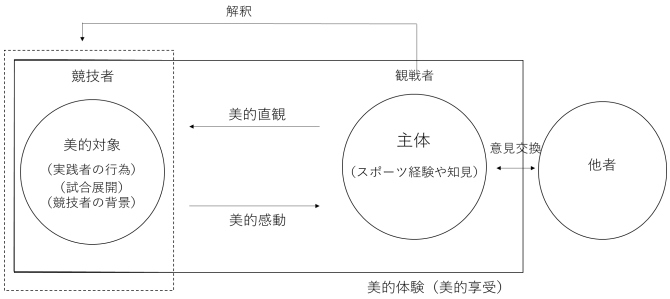

図２　スポーツにおける鑑賞

３）図２を踏まえて、みるスポーツの現状を見直すと、「本質的直観」と「解釈」を行えている人はまだまだ少ないのではないか。その理由としては、スポーツ実践者の動きを一瞬で全体像として把握するのが難しいことや、一般に勝敗や結果に囚われがちであることが考えられた。本質的直観を行うにはスポーツの知見や経験を積むこと、十分な解釈をするには知見を重ねると同時に、ICT などを用いた映像を用いて見返すことが必要である。そのためには、勝敗や結果に囚われず、まずはスポーツ実践者の行為に純粋に注目して現象の直観を行うようにすべきであると結んだ。